

第3章 松山市の地域特性

前計画の課題解決を検討する前に、本市の自然・社会の状況（気候や人口等）がどのように変化してきたかを見ておくことは大切なことです。

第1節 自然的特性

1. 位置

本市は愛媛県のほぼ中央にある松山平野に位置し、東は西日本の最高峰石鎚山のある四国山地を背景とし、西は波静かな瀬戸内海に面しています。

市役所の位置は、東経 132 度 46 分、北緯 33 度 50 分にあります。

松山市の位置



2. 地形・地質

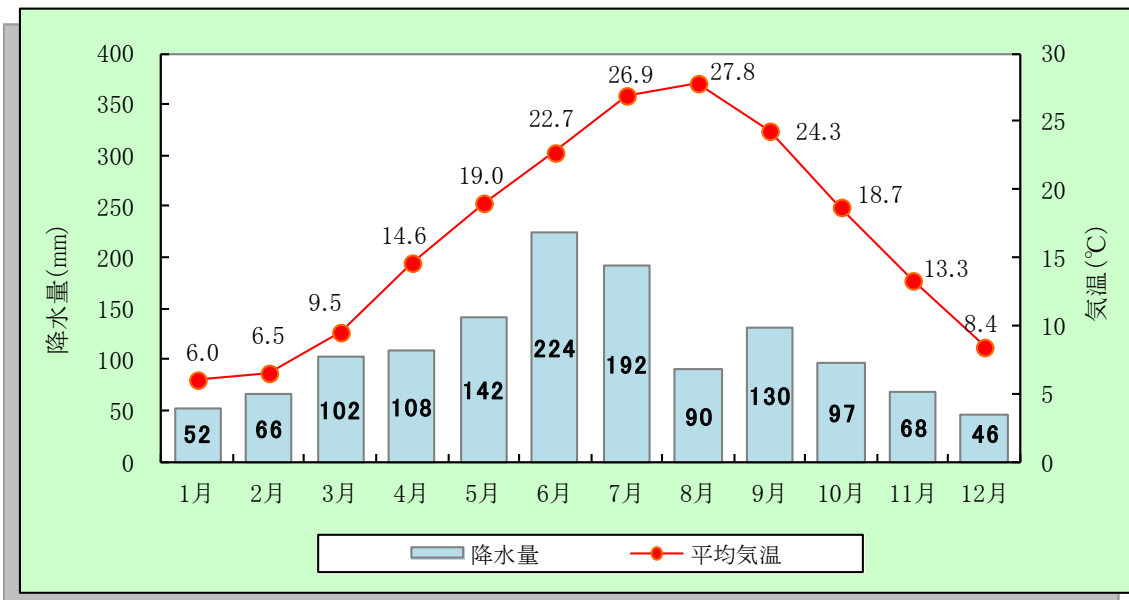
本市の地形は、北西部に多島美といわれる忽那諸島、市街地の東部に高縄山系、東部に石鎚山系が連なり、この両山系の間には石手川、重信川などによってできた扇状地、三角州の沖積平野が広がります。地質上、中央構造線が東西に走っていることが特徴で、断層線の割れ目の花崗岩から良質の温泉が湧き出ています。

3. 気候

本市の気候は、温暖な瀬戸内海式気候で、1981年～2010年の平均気温は16.5度、平均年間降水量は約1,300mm、日照時間は年間約2,000時間です。

全体に降水量は少なめで、積雪もごく少量、台風の通過も太平洋側の地域に比べれば少なく、穏やかで恵まれた気候条件です。

松山市の降水量と気温（松山地方気象台）



資料：気象庁（気温 1981年～2010年、降水量 1981～2010年）

■本市の温暖化事情

地球温暖化の影響は世界各地で表面化しており、海面が過去 100 年間で 17cm 上昇し、近年になるほど海面上昇の傾向が加速しています。21 世紀には最高 59cm 上昇すると予測されており、標高の低い島国では、海面上昇により、インフラ、居住域等が脅かされるだけでなく、国土そのものの消失が心配されています。



本市の地球温暖化の実情をみると、長期的には気温が徐々に上昇してきています。

【松山市の気温の長期変動】



ここ 80 年余りの間に、年平均値は約 2°C 上昇しています。この温度差は、人の感覚ではわずかな違いに感じるかもしれませんが、生態系にとっては、対応するスピードが追いつけないほどの急激な変化なのです。

近年、産業活動が活発になり、二酸化炭素などの温室効果ガスが大量に排出されて、大気中の濃度が高まり、熱の吸収が増えた結果、気温が上昇し始めているのです。このため、人間活動による温室効果ガスを減らす必要があります。

本市では、温暖な瀬戸内海式気候を活かした太陽光発電等の自然エネルギーの利用や、市民・事業者等が日頃から取り組める省エネ行動等を通して、地球温暖化対策を推進しています。

【市民等が日頃から取り組める省エネ行動の一例】

おでかけ



ものを大事に使うことが「エコ」につながるよ。
くい返し使ってゴミを減らし、資源を節約しよう！





マイバッグ等

マイバッグやマイボトル、マイはしを持ち歩こう



自転車

近くへ出かけるときは自転車に乗ったり、歩いたりしよう



車

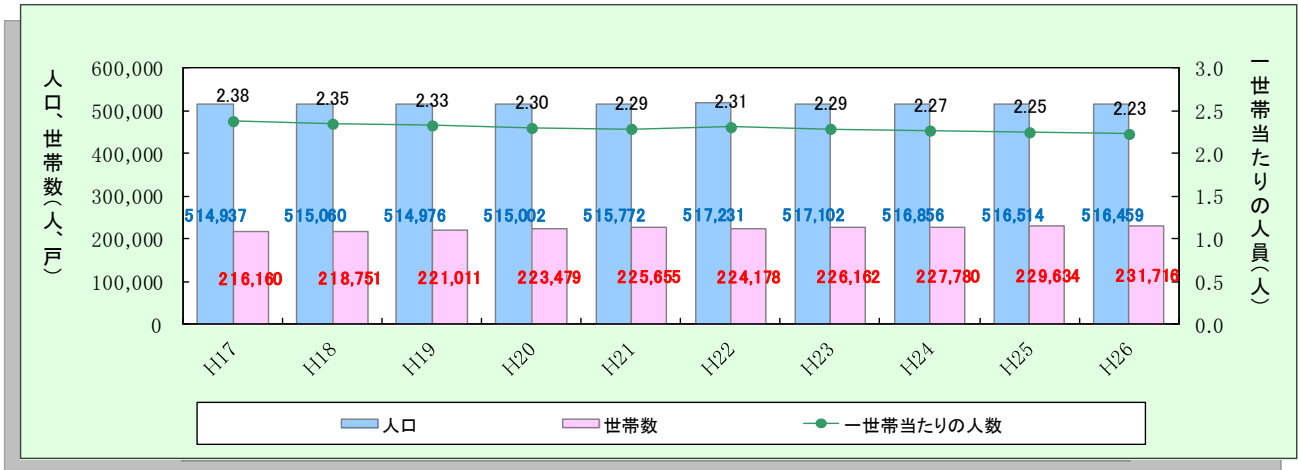
アイドリングストップをしてエコドライブをしましょう

第2節 社会的特性

1. 人口・世帯数

平成26年10月推計の人口は516,459人、世帯数は231,716戸で、一世帯当たりの人数は2.23人です。10年前の平成17年に比べ、人口が0.3%増加、世帯数が7.2%増加し、一世帯当たりの人数は6.3%減少しました。

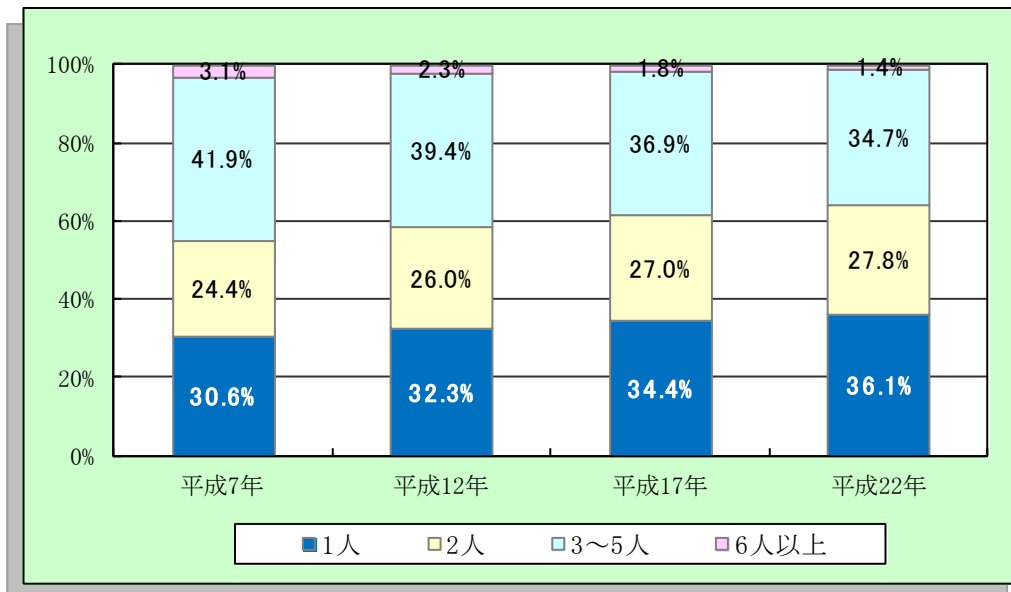
人口・世帯数・世帯人員の推移



資料：松山市統計書

また、世帯人員別世帯数の割合をみると、平成7年から平成22年にかけて、1人世帯と2人世帯の割合が増加し、3～5人世帯と6人以上世帯の割合が減少しています。

世帯人員別世帯数の構成比の推移



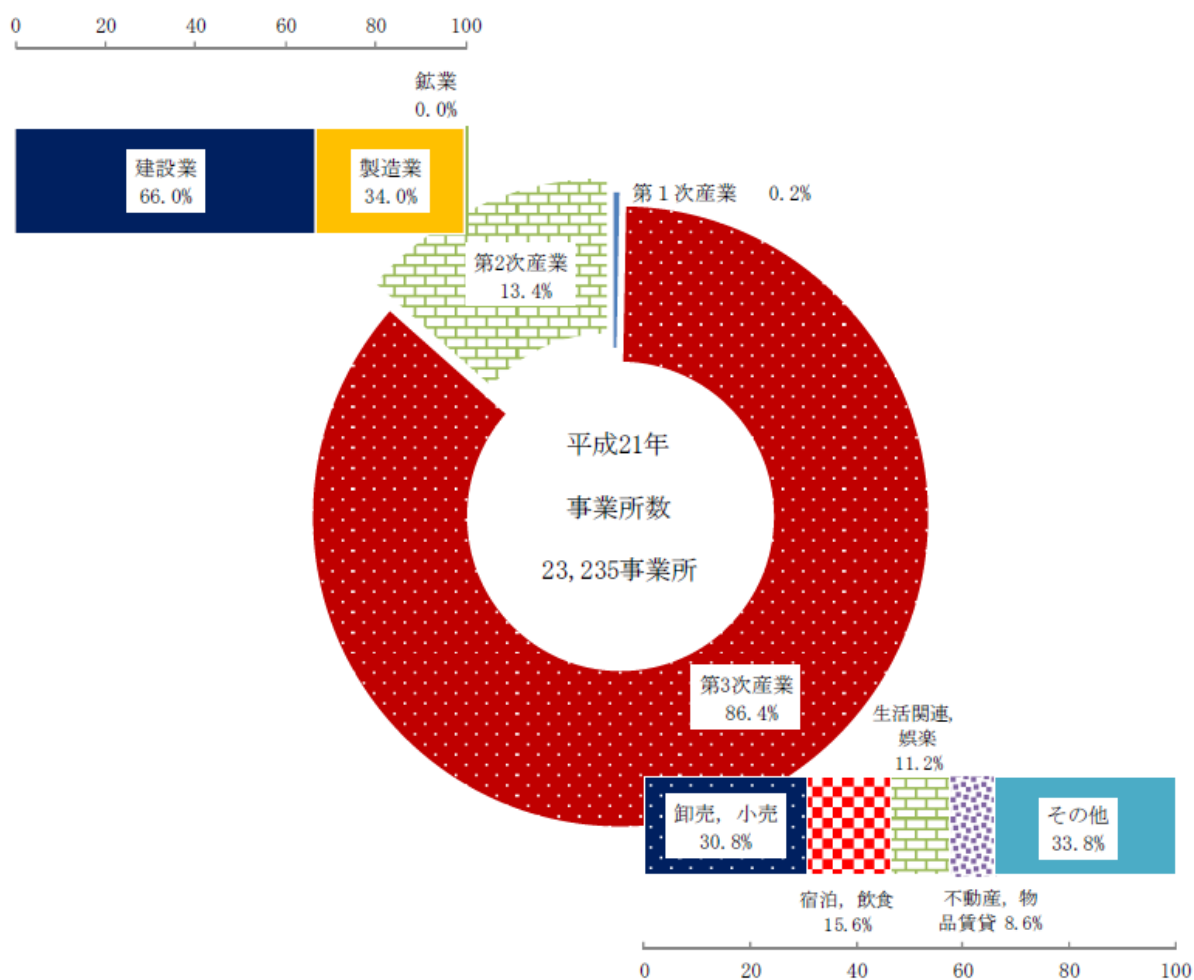
資料：統計からみた市町のすがた

2. 産業

本市の平成21年の事業所数は23,235箇所であり、愛媛県全体(72,993箇所)の31.8%を占めています(資料:統計からみた市町のすがた)。

市内の産業別事業所数は第3次産業が86.4%と大部分を占め、次いで第2次産業13.4%、第1次産業0.2%となっています。第3次産業の中では、「その他」を除くと「卸売、小売」が30.8%で最も多く、次いで「宿泊、飲食」15.6%、「生活関連、娯楽」11.2%などとなっています。第2次産業の中では、建設業が66.0%と最も多く、次いで製造業が34.0%となっています。

産業別事業所数の割合

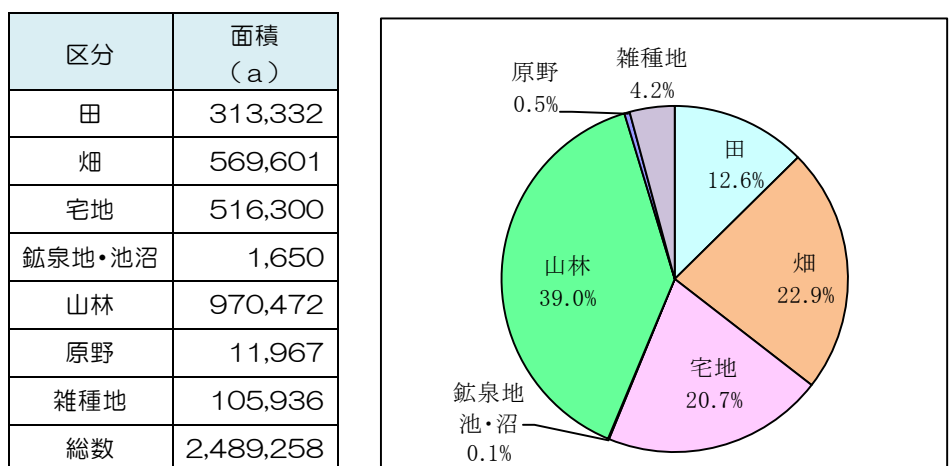


資料:松山市統計書(平成24年度版)

3. 土地利用

平成 23 年の地目別土地利用をみると、山林が 39.0%と最も大きく、次いで畑 22.9%、宅地 20.7%、田 12.6%などとなっています。

土地利用（地目別土地面積）〔平成 23 年〕



資料：松山市統計書（平成 24 年度版）

本市のうち、旧松山地域の土地利用は、松山城周辺の商業・業務系地域、郊外部の住宅系地域、臨海部・北部の工業系地域、田園集落地域、自然環境地域の5つの地域に大別されます。

- ①松山城周辺市街地は、商業・業務施設が集積しており、本市の商業・業務の中心地域となっています。
- ②郊外部については、住宅系の土地利用が多くみられます。その中で都心部周辺は比較的マンションなどの中高密度住宅の利用がみられ、都心部から離れるにつれて低密度住宅地が形成されています。
- ③西部の臨海部には、大規模な工場が集中しており、本市の工業の中心となっています。
- ④南東部など市街地周辺には、優良な農地及び農村集落などがみられます。これらは河川等とあいまってゆとりある田園風景をもたらしています。
- ⑤山地、河川、海岸などは、本市に欠かせない豊かな自然環境を有しています。これらは豊かな都市空間を形成すると共に市街地の背景としてゆとりある景観をもたらしています。

旧北条地域については、山地、河川、海岸のうち特に山地が多く、土地利用としては農業での利用が多いです。沿岸部では一部に工業用地としての利用があり、旧市役所地域を中心に市街地を形成しています。

旧中島地域については、町域全体が島で構成されており、島ならではの美しい自然環境を有しています。土地利用としては、みかん栽培を主とした畑等に利用されています。

4. 将来計画

本市の将来計画として、「第6次 松山市総合計画」の中で下記のような基本構想の体系が示されています。この中で、将来の都市像を「人が集い 笑顔広がる 幸せ実感都市 まつやま」としています。

基本構想の体系



資料：第6次松山市総合計画

また、「環境・都市」に係る基本構想は以下のとおりです。

快適な暮らしを送るために必要な上下水道や道路など、生活基盤の整備・維持管理を推進するとともに、歴史・地域性を生かした松山らしい景観や緑あふれる美しいまちなみの形成が大切です。また、少子高齢化の進行や人口減少が見込まれる今後のまちづくりでは、都市機能を集約したコンパクトな市街地の形成が必要であり、JR松山駅周辺整備については、市民や事業者とともに、県都の陸の玄関口にふさわしい魅力あるまちづくりを進めていくことが求められます。さらに、市民の環境問題への関心が高まり、ごみの減量やリサイクル、節水に対する市民の意識が向上する中で、エネルギー面では、「松山サンシャインプロジェクト」で推進する太陽光発電をはじめとした新エネルギーなどのさらなる活用が必要です。

そのため、景観や緑地などの整備・保全による良好な都市空間の形成や、計画的な土地利用を進めるとともに、良質な住宅の供給促進や上下水道の適切な維持管理、必要に応じた更新を行います。また、環境保全や節水、節電に関する意識の啓発を継続して行うとともに、新エネルギーなどの導入促進や、さらなる省エネルギーへの取り組みによって、低炭素社会の実現を図ります。そして、環境保全と利便性向上のバランスに十分に配慮した持続可能な開発に取り組むとともに、障がいのある人や高齢者をはじめ、誰もがより快適に暮らせるまちづくりを進めます。

